



# 筑紫女学園大学リポジト

## 現代華文文学にみるシンガポール社会問題の諸相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/496">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/496</a>

# 現代華文文学にみるシンガポール社会問題の諸相

石 其 琳

## Aspects of Singaporean Social Issues through Contemporary Chinese Literature in Singapore

Kilin SEKI

### 前 言

本論はこれまでに発表した二編のシンガポール現代文学（微型小説）に関する論文（注1）の継続研究であり、以前同様『新加坡当代華文文学作品選』（注2）を研究の対象とする。今回は特にこの作品集の作品選録条件に、作者は必ずシンガポールの公民あるいは永住権を持つ住民であることが限定されている点に注目し、作品集の収録作品をとりあげ、新たな視点でシンガポール社会問題の実態と特徴を考察したい。

上述作品集は「華文文学」として、作者たちは、シンガポールにおける華人意識に関わるさまざまなテーマで作品を創作している。そのほかに、住民として現地の生活を観察し、多くの社会問題を取りあげ、それをテーマにした作品も多くみられる。作者たちは、現地で人生を歩み、生計を立てるための日常を実感しながら、受ける権利も守る法律も全国民同じなのである。本論は特に彼らの住民としての視点を重要視し、その社会現象と問題をテーマにした幾つかの作品をとりあげ、シンガポール社会の問題と特徴を明らかにすると同時に、作者の住民としての心境と創作意識を考えるものである。以下はそれぞれの社会問題を分類して、関連する作品の内容を検討していく。なお限定された字数の関係で、作品は内容と表現が損なわれないよう略訳にする。

### I 管理国家の規制についての描写

シンガポール政府が国民の生活のあらゆる方面に干渉し、小さな都市国家の社会安定と秩序を維持している実態は、国際社会でもよく知られている。その干渉に関わる規制と罰金の詳細につ

いて、ここでは省略するが、その中身は実に細かく、日常生活を包括する徹底したものである。以下はこの問題点に関して、作品①と②をとりあげる。作者は、一住民としての共感を持ちながら、問題提起をしたと考える。

### 作品① 「前へ進もう」 白荷 (1937年～)

彼はこの国際的大都会で車を走らせている。タクシー運転手になってもう8年。食事とトイレ以外、毎日車の中で10時間は過ごしているため、足も痛くなり、痔も悪くなったのだ。後方の車が追い越したいために、「パー、パー」とクラクションをうるさく鳴らしてきた。「バカもん！」と罵倒。男女二人の西洋人が彼の車を止めた。女性は大きなおなかを抱えた妊婦だった。彼はこの男女を乗せた。ここは繁華街ではなくてよかった。繁華街には乗客は禁止という新交通法が成立して間もないため、うっかりして車を止めたら、罰金または減点を食らって大変だ。

「×××ホテル」、西洋人客が言った。「このホテルは市内の最も賑やかなところですが・・・」

「そうです、知ってるよ」と客。「市内へ進入するには、ERP (注3) を通過しますので、通過料がかかります、利用料金に加算されますが・・・」 「そうですか？初めてシンガポールに来たから、こんな規定があるとは知らないのです。」「OK ですか？」彼は聞いた。西洋人の男性は肩をいからせて、仕方がない顔で「OK」といった。(中略・・・)

タクシーで生計を立てることは容易ではない。運転には集中しないと危険がいっぱいあるのはいうまでもないが、スピードも常にカメラに監視されているし、違反すれば高い罰金が課されるから、彼は常に集中して運転するように気を付けている。三叉路が赤信号になったため、身を任せるように、慣れた感覚で車を止めた。実のところ彼は最初からタクシーの運転手ではなかったのだ。

あの年の不景気下でリストラに遭い、給料の高い高級専門技術幹部は強制的に退職を強いられ、当時は上層部の管理職をしていた彼も例外ではなかったのだ。突然の失業にショックを受け、毎日新聞で仕事を探し、履歴書も百通以上出したのだが、梨のつぶてであった。その時、元同僚から自分が辞めた後、会社はインドから二人若者を雇ったことを耳にした。日々の生活が困難になり、子供の教育費、家と車のローンを抱えて行きづまってしまった。そのような時、友達からリストラされた人たちはタクシー運転手へ転職する人が多いと勧められたのだ。よく考えてみると、タクシー運転手は人のための正当な職業だし、自分の気持ちに葛藤があったが、納得して転職したのだった。まあ、とりあえずこの仕事をやりながらまた探せばいいと考えたのだが・・・もう8年もたってしまった。仕事がつらいのは当然だが、10時間労働の稼ぎは車のレンタル料のほか、ガソリン代、電子費用、罰金など頭痛を催すほどのさまざまな支払いを除けば、前の給料の四分の一ほどしか残っていない。特に最近タクシー料金の値上げのため、人々は地下鉄とバスを利用するようになり、収入も減少したのだ。

「停車！ 停車！」西洋人が急に大声をあげて叫んだ。

「お客さん、ここは繁華街で、最近政府から停車禁止令が出ていて、大変申しわけありませんが、近くのタクシー停車できるところまで乗ってから降りてください」。

「なに？こんな不条理なことは聞いたことがない。妻は妊婦だよ、彼女が大きなお腹で街歩きしなくていいようにタクシーに乗ったのだ、見てわからないのかい？」西洋人は怒った。前席の背部を叩きながら「こんな論理はでたらめだ、とんでもない規則だ。お金を払って降りたいところで降りられないとはどういうことだ？」と罵倒した。

「ここで降ろせば、私には罰金が課されます。すみません、すみません」彼は謝るしかなかった。

「全然便利ではない！とんでもない、でたらめだ・・・」と客は罵倒しつづけ、言葉の激しさはどんどんエスカレートしていくのだった。「私は疲れたというのに、また街の中を歩くの、おかしいよ、ここはとんでもないところじゃないの？・・・」女の方が不満をいった。

ここ数日怒られてばかり、仕方がないか？これからも毎日この調子なんだろう、まあお客さんさえいれば、ガマンするしかないし、運転手をやめるわけにもいかないから。

西洋人夫婦は不機嫌そうに降りた。車内には静けさに戻ったのだが、彼の心には悔しい気持ちがややしばらくおさまらなかつた・・・痔の痛みがまたはじまった。「こんちくしょう！この生活」、彼は自分に言い聞かせた。それから車を前へと進ませた・・・。

シンガポールのこのような厳しい法治主義は、社会秩序を成立させ、効率をよくする半面、不条理で人情無視だと国民たちが怒るような現実の一面も当然避けられないし、国民の生活にも行きすぎた犠牲が強いられるのである。次は作品①同様、その現実に直面しながら、不満とあきれた心境を描写する作品②をみる。

#### 作品② 「知法犯法」(故意に法を犯す) 長謡 (1944年～) (1987年発表)

彼は口あげて、鼻をしかめて「アー」と大きくしゃみを「ハークション」と、四方に飛び散るつばとともに大声で噴きだした。右手を挙げ、指で鼻を揉みながら顔を横にいる彼女に「うん、やっとだした、本当に気持ちがいい」といって、またすぐに鼻の中からねばねばするものがうごめき始め、彼は素早く右手の指で垂れてきた長く白いものを拭き払い、力いっぱい振り飛ばし、そのものは静かに道傍の草に落ちたのだ。

「またなの？50 (シンガポール) ドル飛んじゃうよ？」彼がズボンのポケットからハンカチをとりだし、強く鼻を拭き始めたのをみてから優しくいった。

「警察いるのかい？」彼は悪いことした子供のように、ドキドキしながら360度周囲を見まわした。「警察がいれば、すぐに捕まったのよ！」突然彼女は怒りはじめ、荒々しい声で「気をつけていつもいつてるのに、まったく聞く耳を持たないんだから。昨日はヤオハンの前で、また煙草の空箱ポイ捨てして、もし近くに警察でもいれば、また罰金がとられるじゃない？」といった。彼は「うん、うん」と自然に指をきつく握ってしまい、あたかも面倒を起こすのは指が勝手に動いてわるいのだと、責任転嫁の思いだった。彼女は「またあるのよ！」と、ますます怒りが収まらなくなり、さらに声をあげて「昨夜はモンバドンとダンヨンバドン交差点で、あなたはま

た信号無視したのよ」といって、バス停には乗客がかなりいたことを気づき、すぐに口をつぐんだ。

彼の頭にはまたバックミラーからみえた二本の電眼柱（監視カメラ）が浮かびあがった。昨晚この両手両足がない怪物に煩わされて眠られなかったのだ。目を閉じると、二つの柱怪物はじっくり彼を監視していた。耐え切れなくなって、横で寝ている妻にたずねた、「おい、ボクの車が白線を通ったときの信号は何色だった?」「知らないよ、車運転していたのはあなたよ」と、妻は頭をふって返事をした。(中略)「はあ、ボクはいつも気をつけているけど、あちこち落とし穴だらけ。例えば朝、薬を買いに行ったら、駐車場は満車で、道にはダブル黄色ラインばかり(駐車禁止地域)、どこに車を止めればいいのかい?」「もういいから、いいから、やってしまったことだから、運に任せるしかないわ、もう寝ますよ……」夜中にあの二つの怪物が突然合体して消えた。今度は一人の曖昧な男の顔が見えて……そうだ、先週劇場で自分の横の席に座ったあの若い男だ。自分に向かってカエルみたいな目でらみながら「タバコはやめてください。お金があり余っているの?そちらの看板を見てください」。彼は左上の看板を見たら「禁煙、違反者罰金500(シンガポール)ドル」と書いてあった。慌ててタバコを捨て、靴先で火を消した。暗い劇場から外へ出ると、ほっとして深呼吸したら、突然……一億年前の恐竜が星空に横たわっていて、急に:「陸橋をご使用ください、違反者罰金50(シンガポール)ドル」としゃべりだした。彼は吃驚して目が覚めたのだ。(中略)

妻と二人でバスから降りた。彼はぼんやりしているが、彼女は左右慎重に周りを確認し、右10メートルのところには横断歩道があるので、彼の手をつついて、右へと促した。だが彼は道をそのまま横断しようとした。「ほら!ほら!見えてないの?向かい側に警察官が立ってるのじゃない?」彼女は急いで彼の手をつかんで止めようとした。しかし彼は聞かずに警察官へと向かった。

「お巡りさん、ボクは法を犯してしまった、罰金伝票をください」といって、上着のポケットから財布をとりだし、身分証と一枚50(シンガポール)ドル札を微笑みながらさしだした。「罰金です、もって行ってください」、警察官は不可解な様子だった。彼は振り返って奥さんに「おい、心配するな、罰金とはこんなもんなんだ。ボクはいまやっと解放された、ははは……」

作品②は、厳しい管理社会に対する住民たちの神経質さを滑稽な手法で描写している。先進国において、生活文明化の必要が高くなれば、交通ルールの法治管理も共通の認識として、ごく当然な感覚で国民に受け入れられ、作品の主人公のように、過剰の神経質になるほどのことはないであろう。しかしシンガポールでは、国の事情もあり、そこでしかない監視体制が当然のように市民に重い緊張感を強いている。作者はこの特徴的市民感情を作品通じて露呈したのである。作品①に触れたERPについても、現地では様々な抗議活動を挙げるほど、住民にとってある意味では日常生活を揺るがす深刻な社会問題である。作者の創作に政治的意図性はないであろうが、監視体制に対しての不満、その厳しさに耐え、終始精神状態が不安である主人公は、作品最後の一言で、自分の無力さを覚悟した上、自嘲しながら抑圧から脱出できたと結論付けたのであ

る。

作品①では外部訪問客からの不評不満に起因する怒りと、現地人の対処の心境を描写しているが、作品②では、明るみに出せない現地住民の心の奥に積もる潜在的怒りを示唆している。この怒りから法を軽視し、わざわざ触法して、心の縛りを解放させたのである。シンガポール社会の仕組がもたらした庶民心態のジレンマは、この二作品を通じてよく理解できるであろう。そして作品が微細に描いた住民感情の表現は、決して特別で誇大的なものではないと考える。

## II 女性出稼ぎ労働者問題の作品について

作品集には、女性出稼ぎ労働者を中心に描く、出稼ぎ問題の作品が多数みられる。ここでその関連作品をとりあげてみたい。

### 作品③ 「転運」 白荷 (1937年～)

彼女は女警に101号法廷の被告席に案内され、「座ってください」といいわたされた。彼女の頭の中は真っ白で、穴があれば入りたいほど恥ずかしく、この世から逃げ出したい気持ちだった。

「どうしてこんなことになったのか？」彼女にとっては実に不可解だった。遠い田舎から「阿玉！阿玉！」と母の声が、また「ママ、帰ってきて・・・」と5歳の子供が自分を呼んでいるように聞こえたが、実際には母と子供は自分と遠く離れ過ぎているのだ。こんな結末なら、田舎で飢えても3人で暮らした方がよかった。賭博にいりびたりの夫と結婚するのが間違いだったのだ。借金に追われた末、一人で夫から離れて生計を立てようと思い、チャンスがいっぱいある国際都市に来て、もしかして新たな連れ合いを見つけて、新生活が望めるかもしれないと考えたのだ。だが実際に来てみれば、仕事なんかはまったく見つからないし、頼れる知り合いもない、手持ちのお金もなくなってしまい、途方に暮れた結果、体を売ることに決心したのだった。

原告は彼女が出会った最初の客だった。彼女の事情を分かり、「今日から私の愛人になれ、他の客をとらなくてもよいし、毎月おまえに2000 (シンガポール) ドルあげるから」。彼女は跪きながら火の海から救ってくれた彼に感激したのだ。母親と子供も助かるのだし、彼にいたれりつくせりだった。

「あなたはこの人を知っていますか？」法廷から誰かが彼女に質問した。「当然よ、彼は灰になってもわかるわよ」と彼女はきっぱりと答えた。「あなたが×年×月×日夜×時電話で彼に2000 (シンガポール) ドルを強要したのです。彼は拒否すると、あなたはさらに脅迫したそうです。」

「いいえ、違います。私は彼を脅迫なんかしていません」、悔しさと無力さを感じた彼女は「私は彼に売身金を請求しているのです。彼は私を一か月も専属させ、一銭も支払わなくて私が脅迫したとって、とんでもない話ですよ」、と叫んだ。「あなたは原告に人身攻撃をしています・・・ここは法治国家です。証拠が必要です。いまから当時の電話録音を流してください」。

「・・・あなたは私に2000 (シンガポール) ドルをくれないといけないよ・・・いいえ、いいえ・・・一銭も減らせない。・・・あなたはお金くれないの？私と愛情だけ語りたいの？感情？

…私は何を食べて生きていけばいいの？・・・あなたはお金をくれないの？本当？・・・今に見てろ、罰が当たるよ！」録音が突然中断した。

裁判官の判決：「李美玉、許可なしで売春するのは違法です。録音であなたが原告にお金を強要しています。原告が拒否するとまた脅迫したので、これはまさに重罪です。本庭はあなたの田舎にまだ老母と子供がいるのを配慮し、一年の実刑と罰金5000（シンガポール）ドル、もし罰金の支払力がない場合、3か月余分に服役すれば罰金が免除されます。それにあなたが女性なので、鞭刑を執行しません。服役終了後、正当な職について老母と子供を養ってください」。そして、彼女が警備に連行されようとしたとき、突然「裁判官、私はすでに彼女を許しました！」と彼が大声で叫んだ。退廷。すべてが静まり返った。

この作品について、注目したいポイントは二つある。一つは構想と表現についてである。作品の題のように、「転運」が二重に展開している。最初の転運は、彼女が大都会で自分の「運命」を変えようとすることを意味するのである。結局運命に翻弄され、罪を犯したため裁判にかけられてしまった。そこで法治国家の法律制度を有効に利用して、無力な彼女を罪に落そうとした彼が、判決で刑が下った後、自分の良心に目覚めた一声の叫びで、彼女の運命を逆転させ、二回目の「転運」となったのである。この最後の結末で、読者の不平不満を一気に解消させたのであろう。作品内容としては、非現実的な構想かもしれないが、この二つ「転運」をうまく絡み合わせる描写から、作者は主人公李美玉のような、社会的低層生活者の犯罪案件の審判、その場面を通じて、彼女の差別を受ける苦痛と実態を露呈させているのである。

この作品のもう一つの注目点は、判決の内容に「あなたは女性だから、鞭刑を免除する」との描写である。ここでまず女性の出稼ぎ問題をテーマにしたシンガポールの映画「イロイロぬくもりの記憶」（2013年公開）に触れてみたい。この映画は、多数の映画祭での受賞作品であり、第86回オスカー映画祭でも、シンガポールを代表した参加作品である（注4）。30歳の若い監督陳哲芸（アンソニー・チェン）は、国際映画祭で多数の受賞経験をもち、この作品は彼自身の少年時代を題材にした初めての長編作品であり、シンガポール人の一家とフィリピン人のメイドとの、心の交流を描いたものである。1997年、シンガポールで共働きの両親とともに高層マンションに住む一人っ子の家樂は、わがまま放題で問題児扱いされていた。そんな時、一家にフィリピン人のテレサが住み込みのメイドとしてやってくるのだ。テレサに対して当初は心を開かなかった家樂だったが、次第に2人之间には家族のような関係が築かれていく。一方、父親はアジア通貨危機による不況でリストラにあり、母親はテレサに対して嫉妬にも似た複雑な感情を抱き始める内容である。映画では、家樂の同級生がテレサの悪口を言ったがために、喧嘩で家樂は相手を怪我させてしまい、全校生の前でお尻を叩く鞭刑を受けるような始末になったのである。作品の「人生には、あなたを救ってくれる出会いがある」のキャッチコピーから、世界に通じるべき、ごく普通の家庭の物語だと考えるが、外国へ出品する代表作であるにもかかわらず、鞭刑の場面を当然のように見せている。実はこの鞭刑が国際問題になったこともあった。

1993年外国人グループが、車60台と道路標識の破壊と盗みで検挙され、有罪になった事件があった。中でも特に重罪に問われたアメリカ人が3500（シンガポール）ドルの罰金に、禁固刑4カ月、鞭打ち6回といいわたされたのである。これでアメリカから抗議をうけ、アメリカのマスコミは鞭打ちが拷問同様であると、反シンガポールのキャンペーンを始めたのである。当時のクリントン大統領はシンガポール大統領に「罪より処罰の方が重すぎる」と刑を軽減する願いの手紙を送ったことで、深刻な国際問題になったのである。結局政府は鞭打ちの回数こそ減らしたが、刑を執行したのである。鞭刑という法概念は、シンガポール社会において、如何に重要視され、固く定着された認識であるかが理解できる。当然、この映画は、「鞭刑」を強調するための作品ではなく、フィリピンのメイドが家族とさまざまな矛盾と葛藤の深層を問題視した作品である。以下作品集から同じテーマの作品をとりあげ、シンガポールにおけるメイドの立脚する社会的背景と問題を考察する。

**作品④ 「わが子よ、さようなら！ マニラよ、さようなら！」 黄孟文（1937年～）（1996年発表）**

（その1）彼女は授業の途中で、突然同僚から緊急の電話を受けるよう伝えられた。それは病院からの電話だった。「あなたの家のフィリピンメイドが子供を抱えて飛び降り自殺したのです」と、あまりにも青天霹靂であり、彼女は吃驚して気絶しそうだった。「フィリピンメイドは即死だったが、子供は重体で、現在大巴窰病院で救命治療を受けている」。

（その2）車の中、彼女は噴火した火山の周囲にある逃げ道を探す一頭の雌ライオンのようだった。「一佛出世、二佛涅槃」と呟き、身も心もなく泣きながらフィリピンメイドを繰り返し「卑怯」、「残忍」と罵倒している。自殺なら自分勝手にすればいい、うちの子まで道づれにすることはしないのに？今朝ちょっと不満を言っただけで、まさかこんなに悪毒に報復されるなんて？自身の命はたいしたことはないかもしれないが、うちの息子は宝物なんだ、まだ三歳なのに。Boy, Boy・・・すべてを捨てても彼の命だけは助けたい。

このバカアンナ、毎日の仕事はいつも催促しないとできないんだ：三食の用意、洗濯、アイロンかけ、掃除、子供の昼寝時を利用して、一階に降りてパン、卵と缶詰などを買ってくること。午後は洗車、夜は子供の外語学院への送迎・・・いつも手抜きをしたいばかりなの。今朝コーヒーをまだ入れてもいないうちに、もうベッドに座りこんで、娘は病気になって、ママを探していると自分の娘の写真を見て、涙をこぼしているありさまだった。同じ三歳で、母親が国外で出稼ぎしているから、かわいそうだと知っているのだ。あ・・・あ・・・とんでもない、病気になったといっても、遠く離れて泣いたってしょうがないんだし、仕事もしなくて。ボスとして、彼女を叱ってはいけないの？それで息子を殺すなんて、人間がすることなのか？大学生だったのに、自害殺人は絶対に許せない、だから自分が飛び降りて、すぐにも閻魔大王に会うはめになったのだけれど、うちの息子にはどうしても神様に助けしてほしい。神様！神様！Boy, Boy・・・かわいそうに無理やり道連れにされて。彼女は歯ぎしりをして罵倒したのだ。

（その3）息子は救急室にいる。医者からは面会謝絶といわれた。彼女は自宅に戻ることを迫ら

れ、警察が検視に来るそうだ。テレビはまだアニメ放送が続いていた。一本の長い紐に繋がっている風船が天井に浮かんでいる。もう一個の風船はすでに破裂して、無残にも部屋隅に落ちていた。台所の後ろには数本の洗濯物をいっぱいかけた竹竿が、外の陽射しへ向かって置かれていた。一つの赤い風船が窓際に縛ってあり、とても目立っていた。これらの風船は昨晚の宴会から持ち帰ったものである。窓の内側に椅子が偏角に置かれていた。アンナはここから息子を抱えて飛び降りたのだろうか？警察はずっと頭をつきだして外を見ていた。手袋をしてあちこち測量したり、重々しい表情で、時々質問をしてこまめに記録をとっていた。アンナのベッドには娘の写真が置かれていた。この写真には骨の髄まで深い恨みが感じられる。なぜなら間接的に息子を殺す理由になったから。彼女はその写真をとりあげ、力いっぱい地面へたたきつけた。写真枠は音を立てて砕けてしまった。写真の裏に「わが子よ、さようなら！マニラよ、さようなら！」と英語で書いてあった。これは前兆なのか？警察官は彼女を睨みながら、案件調査が終わるまで、室内のものを破壊してはならないと厳しく注意をした。彼らは丁寧に写真を包み署に持ち帰った。

（その4）病院から喜ばしい大ニュースが入った：男の子はすでに危険状態から脱出できたのだ。左手の骨折、体に皮膚外傷が数か所あるだけで命には支障がないということだった。後脳にも重い障害はなく、あと一週間で退院できそうだ。彼女は宝くじの一等にあたったよりも嬉しかったし、急いで病院の息子のもとへ会いにいった。死体検証の診断報告が公表された。警察は全面的に厳密な調査をして、その結果を大衆の注目するなかで発表したのだ：フィリピンメイドの後脳と背部は、地面への強打によって損壊してしまった。男の子は地面に落ちてから家政婦の懐がクッションがわりになり、数メートル外へ飛ばされたのだった。最初、メイドは一階へ降りた買い物の帰りに、子供が高いところにあがって風船をとっているのを目にして驚き、慌てて窓にあがって助けようとしたのだが、不幸にも二人が同時に落ちてしまったのである。フィリピンのメイドは自分の体で男の子を守ったのだ……

作者は、出稼ぎのフィリピンメイドが直面する、差別の実態と母親の「ボス」意識過剰な思考を、物語の随所に配置している。傲慢で自分勝手な母親には、事件の真相が明らかになったとき、どのように反省するのだろうか？読者は突きつけられているのである。フィリピン出身のアンナは高学歴にも関わらず、シンガポールでメイドの仕事をせざるを得ない背景には、現実を反映した構想であり、上述した映画と共通する問題提起である。以下は同じメイドをテーマにした、別の視点で描いた作品をとりあげる。

#### 作品⑤ 「メイドが逃げた」 李健（1937年～）

李眉は賭博好きで、怠け者。夫は建築業を経営して少々裕福であるため、家事もせずに遊びほうけている。中学生の子供が一人いるのだが、オーストラリアに留学している。家には夫婦だけだが、夫は仕事で留守が多いため、李眉は寂しさに耐えきれずにフィリピン人メイドを雇い、家ではよく友人を呼んでマージャンをしている。そしてそれが中毒になってしまい、毎日の朝夜に

続き、欠かさずにマージャンをするようになった。夫も手におえないため、好き勝手にさせているのである。

メイドアティニの仕事は簡単で、食事を作り、毎日マージャン友におしぼり、食事とおやつをだしたり、時にはチップももらえるのだ。仕事の負担が少ないため、暇の時間が多く、友だちとこっそり電話でおしゃべりすることも多い。最近密かにアティニと付き合っている男がいるが、いつも李眉がマージャンに夢中になった時をみはからって、彼女を誘ってデートをしている。家はアパートの一階にあり、裏にはフェンスで隔った小道がある。そのフェンス越しで二人は愛を語り合っていた。マージャンの音はうるさく、また李眉が集中しているので、台所または家の裏でなにが始まっているのかは、とくに気付かないのだ。日が経つにつれ、アティニは全く気にすることもなく公然と真昼でも彼氏とデートするようになった。

ある日、李眉はいつも通り友達とマージャンをしている。日が暮れて、夫が仕事から戻り、食事をしたいため台所へ行ってメイドを探したのだが、誰もいなかった。李眉に尋ねると彼女の部屋にいるじゃないかと言った。夫はその部屋にいてノックをしたが、反応がなかったためドアを開けてみると、メイドがいないだけでなく、最初に持ってきたトランクも見当たらないのだ。夫は李眉にメイドの行方を再度聞いたが、彼女は啞然として知らないといった。夫、怒り心頭に発す。

事後、近隣からは、当日アティニは一個一個の荷物をフェンスの外へ投げて、誰かがそれを受けて、最後に彼女自身もフェンスを越えて出たそうである。当時近隣からは電話をなんどもかけたのだが、誰も出なかったので、李眉は留守だったと判断し、電話を切ったとの話だった。まさか家政婦が真昼に逃げ出すとは大胆極まりない。あとで李眉から聞いたのだが、アティニは李の寝室へ入って、預けているパスポートを盗み出して逃げたということだ。幸いに貴金属、お金はとられなかったので、そのまま追究することをやめにした。メイドは逃げたのだが、5000（シンガポール）ドルの保証金は損をすることなく、まあ・・よかったということであった。

シンガポールに限らず、世界多くの地域では、メイドが勝手に逃げ出さないように、パスポートは雇主にとりあげられているのが一般的で、このメイドが逃げたということは、雇い主がいかに怠慢であるかを露呈している。作品④と⑤のメイドは、合法的女性の外国労働者であるが、以下の作品のようなケースもみえている。

#### 作品⑥ 「無名位牌」 網雷（1945年～）（1992年発表）

摩天楼商業ビル管理委員会／日時：1990年1月2日午後7時／場所：本会会議所／主席：張安興／記録：秦年亮

「会議開始」。まず主席の張さんから：本日は1990年度第一回目の例会です。忙しいところでご参集していただき、ありがとうございます。90年代に入り、新年に新希望を期待して、本ビルを一新して、ますます商売繁盛させましょう。（中略）張さん：短い30分で全ての議題を終了した。

効率よい、いいことだ。次は「無名位牌」の件・・・簡さん：主席、この件に関して、三か月前にすでに議案を出したのですが、なぜ未だに処理が終わっていないのですか？

張さん：処理していないんだって？ある、あるよ。前年とその前の年度の記録を見ましょう。1989年11月、無名位牌の件について、今処理中・・・1989年12月、無名位牌の件、今処理中・・・

簡さん：処理中、処理中といいますが、私がいま知りたいのは処理後どうなったのか？あなた方は急がないかもしれないが、私は早く知りたいのです。考えてみてください、他のところではなく、わざわざうちの店の向かいに置かれているのよ、とんでもないことでしょうか？ここは光明山（寺名）でもないのにね！

張さん：大丈夫！大丈夫！今処理担当班に処理経過を報告して頂きましょう。

李さん：調査により、この位牌は「黒ガラス」店の髪切り姉さんが置いたのだ。祭っているのはトイレで急死した髪切り女で、服毒自殺だった・・・

簡さん：なぜ自殺したの？

李さん：まあお決まりのテレビドラマみたいなものだろう、恋人に捨てられ、一時諦めきれなかったじゃないのかい・・・（誰か「あなたが捨てたじゃない？」が口はさんだ。）

李さん：（無視）その後あのトイレはずっと幽霊が出るといわれ、だれも怖くて入れなかったんだ。そして数人の髪切り姉妹が位牌を置いて、毎日線香を立て拝んでいた。もう一年あまりたったよ・・・

簡さん：とっ払え、とっ払え。とっ払うべきだ。李さん：私は道士を招いでお経を読んで厄払いをしてもらうのだが、誰かがその位牌をとって焼き払わないといけない・・・（「あなたは主任だからあなたがとるべきだ」、とだれかがいった。いえいえ、この件を提案した人がやるべきだ。（中略）結局みな睨めながら、だれもとりにいきたくないのだ。

張さん：だれもとりにいきたくないし、そのまま置いて、ビルが平安であるなら、もう動かさなくていいじゃないか、他になにか意見がありますか？今日の会議はもうこれで終了です。

簡さん：ちょっと待って、やはりわからないのだが、この位牌にはなぜ名前がないのかい？

李さん：この自殺した髪切り女は、マレーシアから来て、こっそり「黒ガラス」で仕事していたから、だれも彼女の名前を知らないし、みな彼女を「林青霞」（当時有名な女優）と呼んでいた。本当の大スターじゃないから、まさか「林青霞」という名前を付けるわけにはいかないだろう・・・

理事さま全員：ははは・・・。午後8時20分会議終了。

シンガポールの外国人労働者は、政府が指定した国のみが雇用される。作品⑥のような不法労働者の結末には、多くの悲運がともなうのだが、合法的労働者の場合でもさまざまな問題を抱えている。シンガポールの外国籍女性労働者に関する制度について、すでに多くの研究資料がでているため、ここでは提起しないが、中でも注目したいのは、1989年に『私はフィリピン人メイド』の著書が出版され、話題をよんだ点である。著書の女性編集者の夫は、メイドの派遣会社の経営

者であったため、メイドたちの日常がよく理解されている。彼女はこの本をまとめた動機として、「フィリピン人のメイドに対して、シンガポールの雇い主はひどく冷たい。一日中働かせたかと思うと、些細なことでもクビにする。フィリピン人のメイドも感情があり、プライドがある。彼女たちは玩具ではなく、もっと彼女たちを人間らしく扱ってほしい。それをわかってほしかったから」(注5)と語っている。この言葉はまさに上述作品の作者たちの創作する心的動機であるといえよう。

シンガポール女性全体の労働力化率はかなり高いが、経済成長と核家族化、さらに高齢化社会での介護、幼児がいる家庭のためには、雇用税を減額するなど、近年の動向では、外国人家事労働者の雇用を容易にできる方向へと政策をとり入れている(注6)。外国人メイドの人数は、1978年国の「外国人メイド計画」立ちあげ時の5000人から、2013年には21万人以上にあがっている。言語宗教などの関係で、華人は英語ができるフィリピン人メイドを、マレー系はインドネシア人、インド系はスリランカ人を雇用するのが一般的である。ここでメイドの必要性として、理由の一つである核家族化には、子どもの世話をしてくれる祖父母と別居していることが多くなる住宅事情の背景と関連して、別の視点から以下の作品をとりあげたい。

### Ⅲ 住宅問題に関連する描写

#### 作品⑦ 「俺不落殻(エンブロック)」(集団売却) 尤光敏(1937～) (2008年発表)

明お爺さんが25年間住んだ家が「俺不落殻」された。「俺不落殻」(enbloc)とはフランス語で、現在本人が住んでいる共同管理式の住宅が、集団売却になったのである。法律によれば、80%以上のオーナーが同意すれば、少数人が反対しても売却できる。明お爺さんは法律音痴と思うかもしれないが、聞くところによると、彼の若い時分には市政局の財務管理の職を務めたことがあり、法律の知識は必要だし、執行しなければならないので、法律にも詳しいのだ。当初、家の購入にあたり、土地の契約書さえあれば、家は永遠に自分たちが所有する法律から保証され、自分たち以外の他人から強制的に家を売却することは、できないと彼は考えていた。しかし明お爺さんは間違っていたのだ。少数は多数に服従しなければならないことを。あの日、「俺不落殻」委員会関係の不動産会社の社員が来て、明お爺さん夫婦がサインすることを勧め、共同販売のほうは絶対に個人販売より高値が付くし、家が大金に換金できるいいチャンスだと説明した。しかし明お爺さんは意地を張って、機嫌悪く拒否したそう。週末、私は明お爺さんを誘って一杯飲みにかけて。・・・家のことを悩みながら、明お爺さんは大金もいけど、精神的面の損失が大きすぎるのだと呟いた。それもそう、明お爺さんの現役時代では、会社の景気がよく、幸せな家庭であり、子供3人も自立し、かわいい孫5人もいる。教師、官職そして企業経営20年、金融業界10年を経て退職したのだ。現役時代にはとても貴重な時間を過ごせたのだが、定年後の生活をもっと重視したい。調査によれば、「俺不落殻」で大金があってもいまの不動産市場では同じ広くていい条件の家を購入できないそう。しかし多数票で彼の家を売ることで法律がある。

明お爺さんは呆然と深く落ち込んでいた。

シンガポールにはインフラ、医療、環境衛生などいいところたくさんあるが、こんないい住宅をなぜ売らなければならないのか、もっと土地を効率よく利用するとかいって、本当にそうだろうか？明お爺さんは理解に苦しむのだった。実は明お爺さんは愚かな人ではなく、ただ「俺不落殻」が急に来て、彼の生活を混乱させてしまったのだ。仕事を辞めた後、彼は文学、書法などに専念し、精神的に充実すると同時に、晩年の生活に生きがいを感じている。しかしいま家を探さないといけなのは、とても不本意で煩わしく思っている。現在の家はシンガポールにいる次女の家に近いし、よく行き来している。孫二人の学校の送迎などを手伝うため、いつも会えるし、婚殿の車を借りて買い物にいたり、毎日の生活が便利で楽しい。・・・(中略)「金融が不安定で、専門家も困っている時期、どうするつもり？」と悩む明お爺さんに聞いた。私は彼が家族とのふれあいを大切にしたい気持ちをもっているのを知っている。そして一か月後、彼からメールが来た：「やっと家を買った。場所は次女夫婦の新居の近くだ」。

作者は「私」という客観的目線で、細かく主人公世代の心声を捉え主張している。明お爺さんが成功した現役時代は、輝くシンガポールであり、成長する時期で、彼らは発展の原動力を担っていたのである。そして老後にその成果を楽しもうとしたところ、まさか「エンブロック」政策に振り回され、新たに家を探すことで精神的に不安と困惑に落されたのである。住宅に関して、シンガポールは国土が狭いのと多民族国家であるため、政府は様々独自の政策を試みた。その点について、ここでは省略するが、この作品が提示した問題は、住宅と明お爺さん世代の晩年に関わる点である。

高齢化社会の現象は世界共通の問題である。問題の解決には、シンガポール政府は、「アクティブ・エイジング」政策として高齢者が所得を得て、経済的に自立ができることを奨励している。現に住民の65歳から69歳までの世代ではかなりの割合の人口が就労している。その実態について、労働内容に問題も多く議論されているが、他にシンガポール政府は家族の重要性、親孝行のイデオロギーを強調する政策も実施している。住宅に関して、公営住宅を割り与える際に、成人した既婚の子供が優先的に親世代の近くに配置されるのである。その目的は、相互にサポートし合うことができ、介護施設に移動せずに、居住区域での生活を目的としている。作品に明お爺さんが懸命に家を探した結果、上述したシンガポールならではの政策に救われたのである。しかし明お爺さんにはシンガポールに居住する次女がいたから、政策に恵まれ、その近くに家を購入できたともいえる。この点に関して、もう一つの問題が提起されるので、以下その関連の作品をとりあげる。

#### IV 海外へ移民の問題についての描写

作品⑧ 「天灯」 (艾馬 1956年～)

老人が多い団地に住む主人公は、古い世代の移民である。その団地も住民の老齢化により、活気が消失し、寂しき極める状況である。老人は孤独に耐え切れず、自ら天灯を作り、その天灯を飛ばして、海外へ移民した子供と孫が帰ってくることを祈ったのだが、結局天灯が風に飛ばされ、空港へ突入してしまい、老人は慌てて天灯を追いかけて、躓いてしまった。諦めて家に戻った老人は、1週間前に誰かが同じ天灯を空港まで飛んで事故をおこしたニュースを思いだし、心配するあまりに心不全で急死したのだ。天灯の祈願はかなえられるとよくいわれている。結局老人の葬式に、子供と孫全員が彼の希望通り、それぞれ違う国から戻ってきたのだ。

作品⑧の最後に、老人の死後子供と孫たちが世界各国から戻った描写は、皮肉である反面、作者の心から発する深い感傷が見うけられる。当初シンガポールは外部から多くの移民により成立した国家だった。その移民たちの世代をはじめ、立派にシンガポールの国家を発展させたのだが、国土の狭さと競争の激しさに、国民は自分の将来の人生展開に、シンガポールよりもっと大きな生活空間と精神的余裕を求めるため、海外へ移住する希望を抱くような人は決して少なくはない。それもシンガポールならではの現実である。作品⑦で「シンガポールにはたくさんいいところあるのに」と住民としての実感を持つ明お爺さん同様の国民、また多くの国民はシンガポール人でよかったと誇り高く思っても、現に1985年より海外への移住者数が急増している。同作品に「シンガポールにいる次女」という描写から、明お爺さんの他の子供は海外にすることが想像できる。1989年8月国立記念集会の演説で、李光耀首相は移民による人材の流失に対し、「シンガポールが、自分の国であるという自覚をもってほしい」と涙ながらに、国民に訴えるほど深刻な問題になっている。二作品に描く老人二人の異なる晩年の結末は、ある意味で、彼らがシンガポールの住民だったからの宿命であるともいえるだろうか。

## 結 び

以上数編の作品を検討してきた。作者たちは、深刻な視線で、失業、移民、女性労働者、監視社会への疑問、鞭刑、住宅などについて、今シンガポールの社会日常生活の実際問題を、具体的に描写すると同時に、シンガポールならではの特殊性を示唆している。作者たちの年齢層をみると、人生をシンガポールという国の成立と成長を共に歩んできた世代である。だから彼らがこの国の社会意識の変化を敏感にとらえ、未来への期待を語り続ける感慨が、作品を通して見うけられる。

1987年李光耀首相は「私は、国民の私生活に干渉しすぎるとたびたび非難される。でもそうしなければ今日の我々はあり得ないでしょう。・(略)・もし政府が国民の個人的問題——誰が隣人になるのか、どのように住むのか、騒音を出しているのか、どこにつばを吐くのか、またどの言語を話すのかについて干渉してこなければ、今日の経済発展はありえなかった。・(略)・我々はなにが正しいのかを決めます。国民がどう思うのかは気にする必要はないのです」、との

発言がよく知られている。個人の人権や利益よりも社会安定と秩序が優先されるべき主張の背後には、深い歴史の傷痕が潜んでいる。シンガポールでは、19世紀から20世紀初頭及び植民地時代に、世界からの貿易商人の他に、大量の人身売買による華人「苦力」(クーリー)と後にインド人、マレー人など各地域からの単純労働移民によって、最初の国民が形成されたのである。中でも苦力が圧倒的に多く占められ次世代も含めて、国民教養に多くの問題を抱えた背景が大きな起因であり、以来、李氏の長期抑圧的政治体制が厳しい管理社会を育成し、シンガポール人全体の精神、性格、習慣、世界観の変革に尽力したのである。李首相の思想の多くが国民の中に根を下ろし、精神的様相を一変させたのである。前副首相兼外相ラジャラトナム氏は、氏の少し前の時代まで、根なしの植民地奴隷が誇り高い不屈のシンガポール人となって、21世紀に迎えようとしている。かつての卑屈な移民は自信を持ち、根を下ろしたと李氏の功績を語った(注7)が、これがシンガポールの社会進化の現実である。

シンガポールの住民構造は、いま大きく変化しつつある。建国当時の国民の国に対する意識は、ここ半世紀に、世代交代も進む中、シンガポールという東南アジアで生存している特別な国ではなくなり、東南アジアに溶け込んだ一つの国だと考えている。1960年から始まったHDB(注8)政策は、かつて植民地政策を基盤とする異民族のすみわけも解消され、さらに華人社会にそれまで続く「落葉帰根」(いずれは故郷に帰る)の意識から「落地生根」(骨を埋める)への転向もみられる。シンガポリアン意識の芽生えと確信が、シンガポール社会のスタイルを定着させ続けたのである。

2015年、初代首相李光耀の逝世により、「後李氏時代」がすでに始まったといわれている。現在シンガポールは国際社会において、重要な位置づけを獲得し、先進国としての生活レベルを維持するために、今後も移民を受け入れ、新たな形での労働力の需要も避けられない。この国の体制は、自然と人為的環境が変われない状況下、厳しいシンガポール型法治の選択は、簡単に解消できないであろう。新世代の華文文学作者たちは、これからもシンガポールの社会を描写し続けるであろう。今後シンガポールは、より広範囲に世界と関わるにつれ、新世代シンガポリアンたちの日常生活に対する価値観も変化がみられ、政治と社会に対し、新たな問題意識が浮上し、多方面において、直面しなければならない現実を迎えるであろう。

## 注 釈

注1 ① 「シンガポール当代華文文学への視角」筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報 第26号 2014

② 「シンガポール現代華文文学の日本描写についての一考察」筑紫女学園大学・短期大学部紀要 第10号2015

注2 『新加坡当代華文文学作品集』(上)(下)陳榮照 悉尼尔 他編 新加坡青年書局/香港明報月刊 出版 2010

- 注3 Electronic Road Pricing 時間による通過料金徴収管理システム。シンガポール人口密度が高いため、渋滞を解消するため1998年9月1日に実施された政策である。
- 注4 カヌ国際映画祭新人監督賞（カメラドール）、台湾金馬獎4部門（作品賞・新人監督賞・助演女優賞・脚本賞）、東京フィルメックス観客賞受賞。30歳の新鋭陳哲芸監督がオリジナル脚本で撮りあげた作品。
- 注5 「頭脳国家シンガポール」第5章 「増える外国人労働者」（P167）を参照。
- 注6 従来は家事労働者を雇用する際、一人当たり5000（シンガポール）ドルの保証金が必要であったが、近年では保証金の雇用時加入が義務付けられている医療、傷害、死亡保険に組み込まれて負担減になった。そして政府は家事労働者の送り出し国を増やし、現在では13国になっている。
- 注7 「エコ・ディベロップメント」第V章（P169）に「シンガポールの政治哲学—リー・クアンユー首相演説集」下巻の引用文を参照。
- 注8 シンガポールで暮らす場合、高価な民間マンションまたは土地付の家に住まない限り、HDB(Housing Development Board 住宅開発庁)の団地当局の下にある公共団地に住まなければならない。またエスニック政策により、各団地の近隣区や団地棟に対し、人種別の割り当てが細かく規定されている。

## 主な参考資料

- 「頭脳国家シンガポール」 田村慶子 講談社 1993
- 「国境を越えるアジアの家事労働者」 上野加代子 世界思想社 2011
- 「シンガポールを知るための65章」 田村慶子 明石書店 2013
- 「新加坡马来西亚华侨史」朱杰勤主编 広東高等教育出版社 2008
- 「南洋华侨与闽粤社会」 陈达著 商務印書館 2011
- 「シンガポール社会の研究」 陳寿仁編 木村陸男訳 めこん 1988
- 「新加坡国家認同研究」（1965-2000）李志東著 中国人民大学出版社 2014
- 「エコ・ディベロップメント」 大和田滝恵 中央公論社 1993
- 「物語 シンガポールの歴史」 岩崎育夫 中公新書 2013

（せき きりん：アジア文化学科 教授）